



第 67 号
令和 5 年 2 月 28 日 発行
発行 埼玉県立がんセンター
発行責任者 病院長 影山 幸雄

基本“唯惜命”
理念

私たちは生命の尊厳と倫理を重んじ、先進の医療と博愛・奉仕の精神によって、がんで苦しむことのない世界をめざします。



埼玉県のマスコット コバトン

目次

- 副病院長就任にあたって……………1
- 泌尿器科科長就任のご挨拶……………2
- 血液内科科長就任のご挨拶……………3
- 研究所にてサイエンスサロンを2年ぶりに現地開催しました/褥瘡管理者の活動紹介……………4

副病院長就任にあたって



副病院長
岡 亨

令和 4 年 8 月に埼玉県立がんセンター副病院長および総合内科長・総合診療センター長を拝命いたしました岡 亨（おかとおる）と申します。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は平成 4 年（1992 年）に医学部を卒業後、循環器内科学、特に心血管の発生や心肥大、心不全の機序についての基礎研究を行ってまいりました。その後、平成 27 年（2015 年）に大阪府立病院機構大阪国際がんセンター（旧大阪府立成人病センター）に異動し、がん患者の循環器診療を行ういわゆる腫瘍循環器学（Onco-Cardiology/Cardio-Oncology）に携わるようになりました。

がん 5 年生存率は、私が研修医だった平成 5 年（1993 年）には 49%でしたが、令和元年（2019 年）には 68%にまで上昇しています。これにはがん診断技術の発展、低侵襲な手術や放射線療法の開発、がん細胞の遺伝子レベルの研究をもとにした分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬の開発が大きく貢献しています。こういったがん治療が飛躍的に進展する一方で、がん治療、特にがん治療薬や放射線治療に関連した心血管合併症やがんサバイバーの晩期心血管合併症などが明らかになっています。我々は、実臨床における EGFR 変異陽性非小細胞肺癌に対するオシメルチニブ投与時の心血管有害事象を明らかにし（JACC CardioOncol. 2020;2(1):1-10）、この論文は令和 4 年（2022 年）に欧州心臓

病学会が発表した腫瘍循環器学ガイドラインにも引用されました。残念ながら、このようながん治療に関連した心血管有害事象とそれに対する治療法はまだエビデンスが不足し、十分に確立されていないのが現状です。幸い、埼玉県立がんセンターはわが国においても最先端のがん治療を行っているがん診療連携拠点病院の一つであり、引き続きがん治療に伴う有害事象や治療法を研究し、世界に向けて情報発信していきたいと考えています。

がん治療に関連した心血管合併症と同様に、がん患者の高齢化や生存期間の延長に伴い、がん以外の問題、つまり、新たな心血管疾患や糖尿病、感染症をコントロールすることも求められ、全国のがんセンターでの総合内科のニーズが高まっています。がん治療完遂のため、がんサバイバーのQOL向上のために、埼玉県立がんセンターの総合内科をさらに充実させ、がん以外の合併症を持つがん患者にも安心してがん治療を受けていただける環境を整えていきたいと考えています。また、総合内科および腫瘍循環器学はすべてのがん診療科から相談を受けるのが特徴であり、多くの部署とさまざまな場面で関わります。このような背景を活かし、診療や研究を通じて職種や部署の垣根を超えた横断的な協力を促進して、埼玉県立がんセンターの最先端のがん診療と情報や魅力を国内外に発信していきたいと思っています。影山病院長をサポートし、副病院長としての職責を果たせるよう精進してまいりますので、ご指導ご鞭撻いただけますようお願い申し上げます。



泌尿器科科長兼診療部長
松岡 陽

泌尿器科科長就任のご挨拶

2022年4月よりがんセンター泌尿器科に着任しました松岡 陽と申します。多様化の進む泌尿器がん診療の発展に貢献することを使命とし、尽力していく所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。私の大先輩である影山幸雄病院長が発展させた泌尿器科診療にオリジナリティも加えてさらに充実させるべく、また、当科疾患の特徴から、他の診療科や部門、近隣の医療機関、医療支援サービスの皆様との連携も発展させていきたいと考えています。

私は東京医科歯科大学（2024年の統合で東京科学大学となる予定）を1997年に卒業しました。以来、大学病院や基幹病院で泌尿器科診療に従事すると同時に、基礎医学研究や臨床研究も続けてきました。この十数年間は低侵襲手術や臓器温存局所治療の開発と実践、また、それらの治療を叶えるために必要な精度の高い診断技術として、MRIと超音波の画像融合技術の臨床応用、人工知能を用いた診断技術の開発にも従事してきました。診療でも研究でも、たくさんの先輩と後輩と一緒に仕事をし、数多くの意見を交わしてきた経験が貴重な財産となっています。当センターは近年、内視鏡治療やロボット支援手術の導入により大きく発展してきましたが、病院間の競争が厳しくなっているのも昨今の事実です。各病院が個々の特徴を強化し、かつ連携することにより、医療圏としての発展を目指すことがますます重要になるものと

思っています。これまでの先進的治療が標準化し広く普及した今日、自らの経験を活かし、新たな価値ある医療を当センターから世の中へ発信することが私の夢です。

現在、がんセンター泌尿器科では近隣の医療機関の皆様よりたくさんのご紹介をいただいております。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。同時に責任の重さを感じています。皆様のご期待に応えるべく、スタッフ一同診療に励んでいます。手術ではロボット支援手術、腹腔鏡手術、腹腔鏡下小切開手術が中心となりますが、解放手術を含めまして、質の高いがん医療の提供を心掛けています。また、がん専門病院ゆえ、他科進行がんへの診療協力の機会が多いことも当科の特徴ですので、必要時はいつでもご連絡ください。

医療は日々進歩しています。日本のがん診療を担う医師として、常に世界へのアンテナを張り、新技術を貪欲に習得し、そして、自らの診療の質を世間に問い、そして省みることも忘れないことを意識しています。患者さんは医療に満足し、スタッフは当院での経験を誇れる診療科を構築していきたいと思っています。力不足な点も多くございますが、ご指導くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。





血液内科科長兼診療部長
関口 康宣

血液内科科長就任のご挨拶

2022年6月より、
柵木信男先生の後任と
して血液内科の科長兼
診療部長を拝命いたし
ました関口康宣（せき
ぐち やすのぶ）と申します。

私は1995年に埼玉医科大学を卒業し、同年より同大学第一内科（現、血液内科学講座）大学院に入学しました。修了後は、埼玉医科大学総合医療センターの血液内科において、臨床と研究に研鑽を積んで参りました。2009年からは順天堂大学浦安病院に赴任し、教育、研究、造血幹細胞移植の立ち上げに携わりました。若手臨床医と研究者の育成、地域医療の充実に微力ながら努めて参りました。2021年4月に当センターに着任しました。再び埼玉の地で働けることに感銘を受けております。同時に、歴史ある当センターの職員である重責も感じています。今までの経験をもとに県民の皆様へ良質な医療を提供できるように努力していきたいと考えています。

血液内科学の分野の発展は目覚ましく、分子標的薬、免疫療法、新規抗がん剤などの新薬の開発が著しく進歩してきました。それに伴い様々な薬剤が臨床に導入され、治療成績は飛躍的に向上しております。しかし、それらの新薬だけでは完治できない症例があることも事実であり、既存の強力な化学療法や造血幹細胞移植の併用も重要です。いかにして、臨床の現場にこれらの治療をうまく組み込んでいくかが鍵と考えています。血液内科学の発展は道半ばと考えています。当科は、治験、

臨床試験に積極的に取り組んでいきたいと考えています。新薬の開発や新しい標準治療の確立に貢献したいと考えています。また、当科の実臨床における成績も解析し、発信していきたいと考えています。

多くの方々の協力があり、2023年2月からは自家移植を再開することができました。職種や科の垣根を超えたチーム医療の体制が整っているために達成できたと考えています。今後は、血液内科がチーム医療に貢献していきたいと考えています。「千里の道も一歩から」の気持ちを忘れずに日々精進してまいります。

今後ともご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。



研究所にてサイエンスサロンを2年ぶりに現地開催しました

臨床腫瘍研究所 和田 朋子

研究所は毎年、埼玉県民の皆様にごん研究について理解をしてもらうことを目的としてサイエンスサロンを開催しています。サイエンスサロンではがん研究の最先端の話題について講演したり、機器見学・実習も行っています。昨年度はオンライン形式で開催しましたが、今年度は例年感染者数が少ない時期を選び、感染症対策を行いながら2年ぶりに研究所で実施しました。

今年度の講演はCAR-T療法をテーマとして神奈川県立がんセンター 笹田哲朗先生にご講演いただきました。また、オンラインでは実施することができなかった実習も今年度は少人数で行いました。

開催後のアンケート結果によると、ご講演の笹田先生が難しい研究内容をわかりやすく説明してくださ

たため講演の内容を深く理解できたと参加された方々から大変好評でした。また実習・見学を通じて研究の一面に触れることも大いに楽しんでいただけたようです。当初は開催することにより新型コロナウイルス感染症のクラスターが発生しないか危惧していましたが、事後の感染報告もなく無事開催できたことに安堵しました。

今年度、新型コロナウイルス感染症流行下においてサイエンスサロンを現地開催できたことは私たちにとって大きな自信に繋がりました。今後も埼玉県民の皆様ががん研究の一端に触れるお手伝いができればと思います。次年度も世間の状況を見つつ実施することが想定されますので、ご興味のある方はぜひご参加ください。



褥瘡管理者の活動紹介



皮膚・排泄ケア認定看護師 褥瘡管理者 赤坂 和美
褥瘡管理者は、「褥瘡ハイリスク患者ケアに従事した経験を5年以上有する看護師等であって、褥瘡等の創傷ケアに関わる適切な研修を修了した者」とされています。適切な研修とは、日本看護協会が認定する皮膚・排泄ケア認定看護師過程での研修を指し、私はその認定を受け、今年で22年目になりました。そして、2022年4月から褥瘡管理者として専従で褥瘡予防・治療ケアに携わっています。褥瘡管理者の活動は、日常生活動作が低く褥瘡発生リスクがあり、重点的なケアが必要な患者さんに予防・治療計画を立案してケアを実践・評価をすることです。また、褥瘡対策委員会（褥瘡対策チーム）との連携も重要な活動の1つです。具体的にご紹介しますと、褥瘡対策委員会が中心となり毎年12月に「褥瘡予防月間」と称した様々なイベントを行って、患者さんやご家族に情報提供をしています。ここ数年は、コロナ禍で対面式のミニレクチャー

などはできませんでしたが、今年も、褥瘡に関する情報提供のためのポスターを作成し、外来に展示しました。ポスターの前で、患者さんやご家族が真剣に見てくださっている姿を何度か拝見することができ、大変うれしく感じました。「ご存じですか？褥瘡（床ずれ）のこと」という冊子も必要な方へお渡ししています。少しずつでも、褥瘡に関する情報を皆様にお伝えし、褥瘡にならない方法を一緒に考えていきたいと思っています。



12月 褥瘡予防月間のポスター展示写真